

母乳保育の現況

——生後1カ月における栄養法調査——

前田 隆子

Takako Maeda

Studies on breastmilk lactation and neonatal feeding

ヒトの子がヒトの乳を飲んで育つということは、ごく自然の営みである。しかし、人工栄養法の開発と普及によって、母乳保育の減少をみている。母乳については、近年免疫学¹⁾、母子相互作用²⁾などさまざまな分野で研究がすすめられ、その意義が報告されて、母子保健活動の中でも、産褥期の母親に対して母乳保育を推進する努力がなされている。本報告では生後1カ月時における栄養法の現状を調査、検討したので報告する。

方 法

鳥取大学医学部附属病院分娩部で分娩し、産科に入院した褥婦を対象に、産褥1カ月の外来検診時にアンケート用紙を手渡して調査した(表1)。期間は昭和52年7月から9月および昭和59年1月から4月で、それぞれ100名を対象とした。

結 果

1. 生後1カ月時における栄養法

アンケート用紙を集計した結果は以下のとおりで、昭和52年母乳栄養55名、混合栄養38名、人工栄養7名、昭和59年では母乳栄養43名、混合栄養48名、人工栄養9名であった(図1)。昭和59年には母乳栄養が減少し、混合、人工栄養の増加がみられた。

2. 混合栄養または人工栄養の理由

混合栄養にした理由の多くは、52年、59年ともに1) 母乳の分泌不良、2) 母乳で足りているか心配で追加している、であった(表2)。人工栄養の理由の多くも母乳の分泌不良が原因であった。昭和59年では乳頭損

傷や陥没乳頭の問題もあった(表3)。

3. 乳児栄養指導に対する母親の反応

乳児の栄養指導実施について、「よかった」としたものが、昭和52年では母乳群38%、混合群31%であった。いずれの群ともに乳房マッサージなど分泌促進のための援助を希望した者が多かった(表4)。昭和59年では「よかった」としたものが母乳群で79%、混合群で72%であり(表4)、後者で指導が実施されて「よかった」と答えた者が前者よりも増加した。

4. 産褥1カ月間の問題点

産褥1カ月のあいだに母親が直面した問題点は、母乳群に多かった(表5)。その内容には、52年、59年度による差はみられなかったが、児に関連したものでは吸啜力の弱いことやミルクを嫌うなどであった。母親に関したものでは乳腺炎、乳房緊満痛、乳頭損傷があげられ、また疲労感と育児への不安がみられた。

5. 栄養法別の初・経産および職業の比較

母乳群、混合群、人工群の間に職業の有無と初産婦、経産婦別で比較した結果については、大きな差は認められなかった。

考 察

新生児、乳児の栄養法には母乳、混合、人工栄養があるが、可能ならば、母親の母乳で保育されることが理想である。しかし、戦後、欧米の考え方の普及、乳製品の開発、および施設分娩の増加に伴って、急速に母乳保育は減少した。近年母乳保育が見直され、各施設で妊娠中から産褥期を中心に母乳保育の推進が行わ

表1 アンケート用紙

年齢 (), 職業 (), 今回第 () 子, 前回の栄養法 () 。

1. 現在赤ちゃんをどの栄養法で育てられていますか。

イ. 母乳栄養 ロ. 混合栄養 ハ. 人工栄養

2. 1で母乳栄養と答えられた方はいつ頃から母乳のみにできましたか。

イ. 退院まで ロ. 退院後 () 日

3. 1で混合栄養あるいは人工栄養と答えられた方は該当するところに○印をして下さい。

イ. はじめからミルクにしようと思った。

ロ. 母乳が出るようにならなかった。

ハ. 母乳で足りているかどうか心配で追加している。

ニ. 乳首に問題があった。

(具体的にお書き下さい。)

ホ. 児が入院して飲ませなかった。

ヘ. その他

(具体的にお書き下さい。)

4. 入院中に母乳をおすすめしましたがどうお感じになりましたか。

イ. よい ロ. 特に感じなかった ハ. きびしい ニ. その他 ()

5. 退院されてから1番困られたのはどんなことでしたか。

()

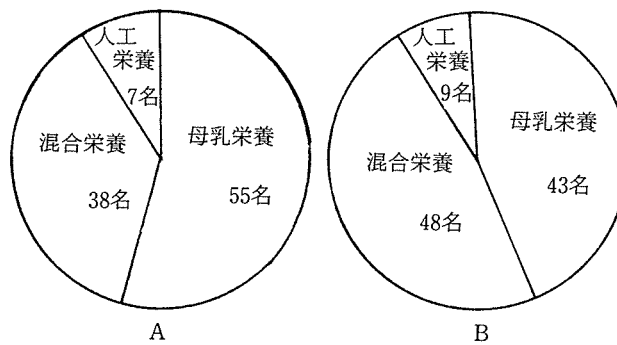


図1 生後1カ月時における栄養法 (100名)

A: 昭和52年 B: 昭和59年

れてきている。筆者も昭和52年に本調査を実施し、その後、乳房マッサージについての研修会や薬剤内服者の母乳への影響³⁾、乳腺炎⁴⁾等について報告し、母乳保育を推進し続けてきた。しかし、鳥取大医学部附属病院外来では、昭和59年には52年よりも母乳栄養が減少した。

混合または人工栄養採用の理由は、母乳の分泌不足

表2 混合栄養の理由

理由	年 度	
	昭和52年(名)	昭和59年(名)
(1)母乳の分泌不良	18	20
(2)母乳で足りているか心配で追加	7	17
(3)母乳の分泌不良と足りているか心配	4	4
(4)乳頭損傷、陥没乳頭	3	3
(5)母乳の分泌不良と乳頭損傷	0	1
(6)児の入院	2	1
(7)働くのでミルクにするため	3	1
(8)はじめからミルクにしようと思った。	1	1
計	38	48

表3 人工栄養の理由

理由	年 度	
	昭和52年(名)	昭和59年(名)
(1)母乳の分泌不良	5	3
(2)母乳で足りているか心配で追加	0	0
(3)乳頭損傷、陥没乳頭	0	2
(4)母乳分泌不良と乳頭損傷	0	1
(5)児の入院	1	0
(6)母乳分泌不良と児の入院	0	2
(7)働くのでミルクにするため	1	1
(8)はじめからミルクにしようと思った	0	0
計	7	9

を訴えるものが多かった。昭和52年には、乳房マッサージなど分泌促進のための援助を望む声が多かった。現在ではそれがほぼ全例に実施できるようになったが、乳量の不足は大きな問題点として残っている。母乳分泌のメカニズムについては多くの報告⁵⁾があるが、促進因子として児の吸啜刺激が最も重要で、この吸啜刺激を得るためには、児の吸啜力などの因子と母体の精神的側面、身体的側面の因子が考えられる(表6)。施設によって母乳率94%⁶⁾などの高い報告もあるが、指導法の差も見逃せない。この点について、藤田⁷⁾は援助のポイントとして、哺乳、乳房マッサージ、搾乳、継続アプローチをあげている。生後1カ月間に直面した母親の問題点は母乳保育者に多く、人工栄養には無かった。十分にミルクを与えて、児が眠ってくれば、母体は休息が得られ、産褥を楽に過ごせることは確かである。また努力しても母乳分泌のない母親に、人工栄養を罪悪視したイメージを与えることは、母子関係をさらに悪化させることになろう。このような問題を避け、しかも母乳分泌への努力を続けさせるための、精神、身体両面への支援の方法が今後重要なことになると考える。従来行われたような、1)妊婦への母親教室での説明、2)分娩直後の直接授乳、3)生後8~12時間後からの授乳開始とその援助、4)退院時指導、5)乳管開通法と乳房マッサージに加えて、さらに母乳分泌機序についての理解を促すためには、妊娠中から母乳保育に関するVTRなどを視聴させ、児の吸啜力増強のために追加人工乳に代えて生後日数×10ml以内の5%ブドウ糖液を与え、あるいはヌーク乳首を使用するなど、さらに創意工夫の必要があると考えられる。

そのほか、母乳保育確立までの母体疲労の原因と対策、人工乳追加による授乳間隔の延長、1方分泌量の減少という悪循環への対処、母親の育児不安に対する相談者の確保、母体の乳汁分泌と栄養摂取など食生活の問題、さらに精神面、情緒面など家族関係も含めて幅広く、きめ細かい継続的な対応が重要だと考えられる。

要 約

鳥取大学医学部附属病院で出産した婦人に対して、昭和52年と59年に、それぞれ100名につき生後1カ月時の児の栄養法をアンケート調査した。

1、母乳栄養は、昭和52年の55名に対して59年には43名で若干減少していた。

表4 栄養法指導に対する母親の反応

母親の反応	母乳栄養群 名(%)		混合栄養群 名(%)		人工栄養群 名(%)	
	昭和52年	昭和59年	昭和52年	昭和59年	昭和52年	昭和59年
・よい	21 (38)	34 (79)	12 (31)	35 (72)	1 (14)	5 (55)
・特に感じない	9 (16)	9 (20)	4 (10)	9 (18)	0	1 (11)
・きびしい	1(1.8)	0	2 (5)	1 (2)	0	0
・その他						
乳房マッサージ希望	16 (29)	0	14 (36)	1 (2)	2 (28)	0
母乳が出ない時の指導を徹底的にしてほしい	1(1.8)	0	1 (3)	0	0	0
母乳が出るようもっと援助してほしい	0	0	0	0	0	1 (11)
母乳の必要性がわからなかった	1(1.8)	0	0	0	0	0
・無記入	6 (10)	0	5 (13)	2 (4)	4 (57)	2 (22)
計	55	43	38	48	7	9

表5 産褥1カ月間に母親の困ったこと（問題点）

栄養群 対象群	母 乳 群		混 合 群	
	昭和52年	昭和59年	昭和52年	昭和59年
児に関連	<ul style="list-style-type: none"> ・ 児の吸啜が弱く搾乳が大変 ・ 分泌不良なのにミルクを飲まない ・ 母乳を飲みながら泣き心配 	<ul style="list-style-type: none"> ・ ビタミンK不足で治療 ・ 哺乳力が弱く搾乳して与えた ・ 夜になると児が泣く 		<ul style="list-style-type: none"> ・ 児の吐乳 ・ 検診で母乳不足と言われた
乳房、乳首	<ul style="list-style-type: none"> ・ 乳腺炎 ・ 乳房緊満、乳房痛 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 乳頭損傷 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 乳頭損傷 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 母乳分泌不足
母体に関連	<ul style="list-style-type: none"> ・ 来客があり休めない 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 眠りたい ・ 夜眠れない ・ 頻回の授乳で疲労 ・ 育児への不安 		<ul style="list-style-type: none"> ・ 第1子の嫉妬

表6 児の乳頭吸啜促進に影響する因子

1. 児側の因子

- 吸啜力
- 哺乳欲 (生後日数, 哺乳時間と量)
- 舌小帯癒着の有無
- 体重, 性別
- 疾患等

2. 母体側の因子

1) 精神的側面

- 母乳哺育への意欲
- 正しい授乳法の理解 (抱き方, 含ませ方, 眠っている児のおこし方)
- 母乳分泌メカニズムの理解 (母乳分泌が悪くても吸啜させる)
- 児への愛着

2) 身体的側面

- 母体疲労
- 扁平乳頭, 陥没乳頭, 乳頭損傷
- 乳汁分泌
- 会陰の創部痛
- 内服薬と疾患

2、混合または人工栄養法採用の理由は母乳分泌不良が最大原因であった。

本研究にあたり研究の場を提供いただき、ご校閲いただいた鳥取大学医学部産科婦人科学教室前田一雄教授、ならびに御指導いただいた本学杉原千歳助教授に深謝いたします。またアンケート調査に御協力いただいた産科婦人科外来ナースの皆様にも深謝いたします。

文 献

- 1) 埴地正文：周産期医学，14，533～537，1984。
- 2) 小林 登：母乳哺育；メディサイエンス社，1983。
- 3) 前田隆子，杉原千歳：鳥大医短部研報，7，5～9，1983。
- 4) 前田隆子，杉原千歳：鳥大医短部研報，8，1～7，1984。
- 5) 青野敏博：周産期医学，14，545～548，1984。
- 6) 藤田八千代：助産婦雑誌，38，548～553，1984。

ABSTRACT

In 1977 and 1984, 100 subjects each were randomly selected from women who were delivered in this University Hospital, and questionaired about the way to feed the baby at 1 month of birth. The results obtained were compared between both years.

The babies were fed with breastmilk alone by 55 mothers in 1977, while 43 mothers in 1984.

Bottle-feeding and bottle-feeding mixed with breastmilk lactation, observed in 48/57 in 1984 and 34/45 in 1977, were attributed to insufficiency of breastmilk secretion. Some valid measured to facilitate breastmilk secretion are wanted.